
一部50円です

消えた頼母子 屋根替え

全身がススでまっ黒になって、だれだかわからない。目だけがギョロギョロして笑い出しそうになったものだ。

田舎のカヤ葺屋根の葺き替えは、村人にとって大事な行事であった。私が小学生だった頃に、我が家も屋根替えをした。これが最後の屋根替えになった。それから、村の家々は次から次へと瓦葺になってしまった。

カヤ葺をする日は、朝早くから村の人が集まる。荒縄をひと巻き、大根やイモなどの料理モノを持って、親しい家の人は酒や寿しなどを抱えてくる。大事なカヤは前日までに各家から届けられる。持ち込まれたカヤと我が家で貯蔵していたカヤが山のようにになって、家の周りの田んぼに積まれていた。

カヤは村の入会地であるカヤ山から刈りだされたものである。カヤ山の世話は大変である。広大な山の斜面に雑木が生えないように下刈りし山焼きをして育てた。秋の晴れた日、村中の人々が2日ほどかけて刈り取りをし、刈ったカヤを一抱えするぐらいの束にして立て掛けていく。作業が終ると、村人が集まり抽選が行われる。細く短い不出来なカヤを公平に分散させる知恵である。抽選によって各家の取り分が決まると、それぞれに名前を書いて集めておき、後日運び出すのである。私も3束ぐらいを背負い山道を下ったものだ。途中カヤが山道の木々にひっかかり、歩きにくく横歩きをしなければならず苦労させられた。

村の戸数は18軒あって、毎年1、2軒が屋根替えをした。屋根替えの費用は職人さん一人の費用ぐらいで、負担は少なくすむようになっていた。屋根葺きは素早く仕上げないといけない。雨が降ると困るので、一週間以内に仕上げる。今と違い、交通の便が悪く、少し遠い人は屋根替えする家に泊まっていた。屋根の大きさもいろいろで屋根にのっているカラス（大棟に上げてあるX字形の組み木、または千木という）の数によって家の大きさを見分けた。小さい家だと5個、普通で7個、大きな家だと9個。大きな家はカヤが多くいるので、自前のカヤ山を持っていて、カヤを貯えていた。

高度成長が田舎にも押し寄せ、杉の植林が盛んになりカヤ山の周囲にも植え込みした。その結果、カヤが減っていった、という。カヤが減った為にカヤ葺きの屋根は出来なくなり、瓦屋根に変わっていったのである。そして、屋根替えの頼母子講は消えていった。村人が知恵を出し助け合って暮らしてきた風習のひとつが無くなったのである。

秋風にそよぐカヤを見かけると、遠い日に見たススまみれの顔からにじみ出た村人のおかしさを懐かしく思い出す。

女優M(1)

京都・百万遍あたりで、ときどき作家水上勉を見かけた。亡くなっておよそ十年経つので、九十年代のことだ。七十歳後半から八十にかけての晩年の姿だった。

水上の横には四十ほどの女性がときどき寄り添っていた。手をつないでいたり、女性の手を両手で包むようにして寄りかかって歩いていることもある。それは、女性が老人を介護しているふうでもあり、恋人同士のようなふうでもあった。女好きのぬめった雰囲気はなく、爺むさくもなく、水上はさらっとしてすがすがしい印象だった。そんなところが女性を惹きつける魅力のひとつなのかもしれない。いくつになっても、女性が歓喜の声をあげるツボの探り方、おさえ方というものをこころえているのだろう。

水上は豊富な女性遍歴をもつ。作家になる前は四十種以上の職業を変えたというが、関係した女性はその数をはるかに上まわるだろう。自らの経験を作品に織り込んだりもしている。女性だけでなく、禅家の小僧時代に知った男色をテーマに、そのものズバリ『男色』（「だんじき」と読ませるところは水上のしゃれっ気か）という小説も書いているが、男色については次号以降で触れることにしよう。

水上の長男、窪島誠一郎が今春三月★

台風18号

最近の気象は、まさに異常つづき。先日上陸した台風18号による大雨で気象庁は、先月30日から運用した「特別警報」をはじめて発表した。

特別警報は、数十年に一度しかないような非常に危険な状態の時に発令されるという。

「ただちに命を守る行動をとって下さい」と実際に呼びかけられたらどうする？

避難指示地域の人たちの不安は如何ばかり。まだ運用が始まって間もないだけに果たして、これだけでどんな行動がとれるだろうか。

台風は夏枯れた水がめに水を供給してくれる重要なものだが、もちろん被害も避けたい。私の田舎でも橋が流れて、家へ帰れず近くの親戚やお寺に泊まり、やっと雨水が治まってから、それぞれの家路について事を想い出し肌寒さを感じる。

最近では、台風が呼び水のようなようになって経験したことのないような大雨になることが多い。近所の人の声で、「空き家の大戸が倒れている」という声で、すぐ飛んでゆく。

大判の煎餅を焼いているようなかっここで倒れている。ちよっと起こそうにも手に負えない。他人様の歩行

に迷惑にならないから、当分人の手のあくまで、このままで。胸をさすりながら、「このぐらいですんでよかった」ヤレヤレ。

たわごと

「こんな毎日のくり返しにどんな意味があるのだろうかとおもうこと再三」

「これから先、何を目標にと考えれば、不安とむなしさだけが残り、いらだちさえ感じる」

「こんなに長生きするなんて夢にも思わなかった」

「もったいない、もったいないと手を合わしながら、なアどう思うと視線を向けてくる」

次から次へとわいてくるいろいろな事に、立ち向かう度胸をもち、今、命ある限り有効に使えればいいじゃない：年金もあることだし：。

戦前戦中戦後生き延びて来た。たくましいお婆さんのたわごと。

出会うごとに、この話し、アハハハ：世間はばかり人目も気にせず、笑う。ヤレヤレ スーツとしたと言う。

おばあさん、二人のたのしい会話から。

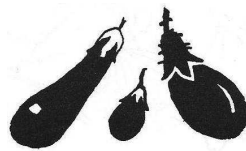
秋茄子

秋茄子は美味しいが、「嫁に食わずな」という。脂がのつて美味しい秋サバ、秋カマスもそういう。美味しいものほど嫁い

びりで面白く強調した古いコトバである。茄子は漢方薬では、身体を冷やす野菜とされ、子どもを宿す身が食べすぎるのをいさめているのだという。

それでも、美味しく感じるのだから暑い夏だから、さわやかな秋になり食欲が増しているため「天高く馬肥ゆる秋」

日本の味覚を堪能するのにいい季節である。



俳句

積読の一書抜き出す秋灯下

土田 裕

逆さ富士湖面に映えて初紅葉

秋風や聞き覚えなき鳥の声

廃校の庭を自在に赤とんぼ

主なき屋敷の庭の草紅葉



★に『父水上勉』という評伝を上梓している。窪島は、戦没画学生の絵画を集めた無言館の館主として知られているが、父水上勉との三十年ぶりの劇的な再会が、窪島の名を有名にした。窪島の父探索物語はNHKの連続テレビドラマにもなっている。

この評伝は水上の生涯を冷徹に語っている。「女優泥棒」という一説がある。タイトルの意味は読めばわかるが、ここに水上が関係した三人の女性が登場する。窪島は「注意深く紹介せねばならない」といって、アルファベットで表記しているのだが、三人ともわりと簡単にわかってしまうのである。

一人目は、多くの外国スターとも共演したいわゆる国際派女優M。

二人目は、今は日本の詩壇の大重鎮になっているという女流詩人のS。

三人目は、フジテレビの「3時の×××」の司会をしていた女優のM。もちろん一人目の女優Mとはちがう。

いちばんわかりやすいのは三番目の女優Mである。水上とはいつとき熱烈な恋愛関係にあつて、文壇でも芸能界でも有名であつたらしい。一九九八年にはこの二人がそろって文化功労者に推挙されている。日本を代表する女優、森光子である。

女流詩人Sは新……。 (以下次号) (猿)

ステロイド剤の恐怖3

梵店主

一時間毎に起きてトイレに行く、眠れないのだ。他人事ではない。よっちゃん、毎夜不眠症の恐怖におびえていたのである。睡眠剤を最高の二錠もらい一度に飲むが効かない。

ある夜、よっちゃんは決めた。眠れない苦しみを味わってやろうと。毎日、昼から夜ベッドの上で寝ているのだから、夜に寝むれずとも問題ない、と考え直したのである。

医師に眠剤と胃薬の服用を止めることを伝えた。医師は心配だったが、よっちゃんは「眠れぬことをじっくり味わいます」といって医師や看護師をあきれさせた。

相部屋で周りが糖尿病患者だから、いびきをかきながら皆よく寝る。不整脈がある人は、スリープ・メイトというマスクを付けて寝る。いびきもかかず朝まで熟睡していた。そんな病室でよっちゃんだけが、一時間毎に起きては、トイレに行っていた。

むかしは、病院の一階に眠れぬ患者のための休憩室があり一夜を過す人が幾人もいたという。

よっちゃんの病気は特に何処が痛いとかいうのではないが、痛い手前の状態が続くのである。

筋肉が壊され皮膚と骨の間の筋や神経がエラク敏感になって、歩く時も足裏の筋肉が無くなり骨で歩いているようになって。コツコツと音が聞こえそうな感じなのである。ところが、上半身は固く太った状態になる。卵に割り箸を刺した感じの印象だと想像してもらったらしい。

この病気は、傍目からは中々理解されない。一見すると怠け病ではないかと思えるからだ。

ステロイド剤の投薬は最初最高の量が投薬され、病状が治まったら、少しずつ慎重に時間をかけて薬の量を減らしていくのが一般的だ。薬を減らすのに数年かかる人も多いらしい。寛解という数値に達すると一生一定量のみ続ける。それが、10ミリであったり五ミリであったりする。まれに飲まなくてもいい人もいるらしいが、詳しくはわからない。

よっちゃんが一番困ったのは、薬の副作用で食欲が強くなって、病院食では足りなかったことである。担当の医師に言っても、仕方がないので、病院食は全て食べた上にレストランに行って、ステーキなどを食べた。医師は体重が増えないことを条件に好きに食べて下さいと黙認してくれていた。



連載◇おつちよこチヨイぼけ7

正気の沙汰か？ 東京オリンピック開催

「へそ曲がり」と言われようと「あまのじゃく」とそしられようとかわまない。二〇二〇年東京オリンピック、いいの？ そんなことしてる場合？ 本気でみんな歓迎してるんですか？ 日本中で反対しているのは私だけ？ まさかそれはないだろうけど（ネットとやらを見る習慣がないので、反対勢力がいてもわからないだけかもしれないけど）。私は一人ぼっちで「東京オリンピック開催反対」を唱える。「芥川だより」で。

去る九月七日、ブエノスアイレスで開かれた招致演説。あれ、何？ はっきり言って正視に耐えたのは高円宮妃久子さまだけだ。生まれ育ちの良さというのは、あらがえない、素敵だと思った。だが、その後に続いた人たちのカタコトのような英語と、取ってつけたような笑顔。「こつ恥ずかしい」という日本語以外思いつかない。

もちろん、パラリンピックの佐藤真海選手はけなげだと思った。滝川クリステルは美しく、英語もフランス語も流暢で、さすがアナウンサーだと思ったが、「お・も・て・な・し」と合掌のポーズにのけぞった。「うそでしょ、あれはタイの挨拶やんか！ 日本ではお坊さん以外、お礼

言うとき合掌する人、見たことないで！」と叫んだが、もとより滝クリの耳には届かない。フジヤマ、ゲイシャみたいなもんで、西洋人の思い込みに迎合している感じがグロゲロ（古いー）だが、何と今年の流行語大賞最有力候補なんだと。

私はフランス語どころか英語も話せない。もちろん、カタコトも無理。だから、猪瀬都知事以下の皆様のスピーチに難クセをつける権利はサラサラない。あの場で、あの英語力で、必死で招致演説に命をかけた皆さんは尊敬に値する。私なんかビビって壇上に進むこともできないだろう（そういう人にはそもそも頼まないだろうけど）。その事実をもってしても、「なんじゃ、ありやく」という違和感、お尻もぞもぞ感はぬぐえない。テレビに向かって私は小さく叫んだ。もうやめて。

そしてとつと寝た。多くの日本人が手に汗握って、「東京が勝ちますように」と夜つびで祈っていたとは知らなんだ。「まあ、マドリッドやな、イスタンブールでもいいんちゃう。初めてのイスラム圏開催。ま、お気ばりやす（ここは京都弁がふさわしい）。だって、私は東京開催反対論者だから。それでなくても、東京は一極集中が進んでいる。何もかも過密で、そこに生きている人が息苦しいのではないかと思えるぐらい（大きなお

世話だけだ。

都市でも何でもそうだが、適正な規模というものはあるはずで、それを東京はとくに超えている。しかも、東南海巨大地震がいつ起こるかわからないリスクをはらむ。さすがの私も、「オリンピック開催中に巨大地震が起きたらどうすんですか？」とは言わない。まさかそんなピンポイントはない、と思う。だけど、東京の一極集中をさらに進めたら、悲劇は確実に大きくなる。多数の人命や都市機能が奪われるだけではなく、日本の政治経済の中核機能を東京に集め過ぎたら、その震災から立ち直るのに時間がかかり過ぎてしまう。

今から準備をしておくべき、と私は考える。仙台の人には相談していいので、賛成してもらえないかどうかはわからないが、仙台を第二の首都にする。東京をやめてしまうのではなく、日本の中核機能を分散するのだ。リスク管理、である。それぐらい、地震大国なんだから当たり前なんじゃないかと思うが、日本のお偉いさんは考えていない。大阪の取るに足らんおぼはんが考えたって、誰も聞く耳をもたないだろうけど、いいのだ。私には「芥川だよ」がある。

どうして仙台？ と聞かれたら困るのだが、千年に一回の大地震に見舞わ

れたのだから、向こう千年はないかも？というところで(あつたら、ゴメン)。

仙台首都化を進めて、二〇二八年仙台オリンピック開催。東北全体が復興した姿と新第二首都を世界の人々にお披露目する。しかし、二〇二〇年に東京だったら、二〇二八年仙台は完ぺき消える。日本人、考えがなさ過ぎると思うのは私だけ？ たとえば、開催予定地のベイエリアなんて液化化確定なのにマンション購入に人々が殺到しているような。摩訶不思議。オリンピックって始まったら何週間かで終わるし、「選手村が見える」がどれほどの資産価値だっというんだらう。ワケわからん。何より、新聞もテレビも「バンザイ！ 万歳！」みたいな論調の報道ばかりで、そのうち大本営発表でもするんじゃないかならうか。

そんな私の憤慨をよそに、親友は「オリンピック、ええやん。これで景気も上向きし、数兆円の経済効果もあるんやろ」ととってもノーテンキなことを言う。たわけ者である。

「オリンピックみたいなもの景気を浮揚したらアカンねんて。日本は懲りてるはずやん。コンクリートに血税を使い過ぎた、年金の分まで使ってしまう。ゼネコンと土建屋以外幸せにならん税金の使い方は断固、反対せなアカンのに、オリンピックは国民が大

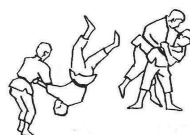
アカンのに、オリンピックは国民が大好きなお祭りやから、大義名分ができて好き放題。終わってみ、間違いなく『オリンピックのツケ』がまわってくるぞ」。

知ってますよ、東京オリンピックのおかたの費用は都で既に貯めてるって。猪瀬知事が言うてはりました。なるべく、カネを使わないようコンパクトにやる、とも。「東京の勝手」であると思う。それでも言いたい。福島で汚染水ダダ漏れで止める手立てがないというのに、「世界一安全な国」とシヤアシヤアと総理大臣が嘘を言っている？ 財布が盗まれても返ってくる、と言いつついいのか？

そりゃあね、中国と韓国が東京開催を反対していると聞けば、「ザマミロ！ IOC委員会の皆さん、日本に一票いれてくれてありがとね」とお礼のひとつも言いたい気持ちはある。そして、まあ日本のことだから、それなりに感動的なオリンピックをやるだろうとは思う。トルコ、スペインより日本の方が成功する確率は高いはずと思わぬでもない。でも、いま東京でやりたがる神経が許せない。東北が完全に復興してから、東北でやるのが正しいに決まってるんちゃうん？ 私怨になるかもしれないが、年金減らしで、掛け金増やして、消費税まで上げて、どの口で「オリンピック開催」を唱えるんだよ、と言いたい。

それに、「金メダル、金メダル」という風潮が予想され、金メダルを取らないと恥、みたいに決めつけ「これじゃ、日本柔道界はダメだ」とか「体操ニッポンの名が泣く」とか言う人が絶対出てくる。自分が言われたわけでなくても「じゃ、アンタが金メダル、獲ってくれば」と言つてやりたい。みんながスポーツを楽しんで、その先にあるのが金メダルならいいけど。強い選手をつくらねばと選手を叩いたり、のしつたりする輩も跋扈するに決まっている。教育上、金メダル至上主義でいいのかと聞きたい。

この娘にしてこの母ありで、うちの母、八七歳は反対論者だ。「日本は借金あつて、年寄ばっかり増えているのに、税金の無駄遣いしてる場合じゃないって。自民党の思うつぽやないの」と怒っていた。慧眼である。しかも、母は熱中症のことまで心配していた。「今年みたいに猛暑だったら、どうするの？」。それ、私に聞かれました。「四月に桜が咲くころか、秋の紅葉のときにやらんとしようないわね」。開催の日にも七月と決まってるんじゃないでしょうか、お母さん。(AO)



大江雉兎

徒然草の第二百三十一段には、料理人としても評判の高かった園別当入道のエピソードが記されている。ある寄り合いでのこと、参集した人々は入道の包丁さばきを見たいと思っていたのだが、お手並み拝見とあからさまに求めるのも不躰かと躊躇っていた。すると、そんな空気を読んだ入道は「実は『百日の鯉』（鯉を百日つづけて捌くこと、料理の修業か）を続けておりまして、今日も捌かねばならないので皆様にお目に掛けましょう」といい、すずんで技を披露したという。

『百日の鯉』という修行が本当に存在したのか、それとも自らの腕前をひけらかすために別当入道がとっさに思いついたデマカセだったのか、細かいところは措くとして、徒然草は、そんな行為に対して、ある大臣が「態とらしいマネだ」と冷たく言い放ったとの話も記している。さらに総論のような調子で、演出を凝らして面白く盛り上げる（振る舞ひて興ある）より、態とらしい盛り上げはしないで落ち着いている（興なくて安らかなる）方がいいとも言う。物事を斜め四十五度から眺めては一言二言の贅言を並べる兼好らし

さが存分に発揮されている章段である。中学校や高校の教材でも取りあげられることが多いので、ストーリー自体は有名なのだが、つっこんだ解釈を施すとなると一筋縄ではいかないことでも知られている章段でもある。

この園別当の話が頭に浮かんだのは、九月のI O C総会の中継を見ていた時のことだった。二〇二〇年に東京で五輪が開かれることが決まった、ブエノスアイレスでのあの総会である。招致レースの勝因はあれこれ指摘されているが、プレゼンテーションに絞れば滝川クリステルが流暢なフランス語にゼスチャーを交えて「おもてなし」の心を紹介したのはいくらかは効果的だったろう。もちろんプレゼンテーションという文脈があつてのことだから、リップサービスのなところも少なくない。そういう意味では、日本には伝統的に「おもてなし」の美德があり、訪れる人を心から慈しむというのは、放射能の汚染水は完全にコントロールされているのと同じくらいに正しい。だがプレゼンテーションという文脈を取っ払って日常生活に戻すとどうだろう。「おもてなし」という言葉が意識の前面に立ち現れるのは、演出があつてのことではないだろうか。吉田兼好が切り捨てた「振る舞ひて興ある」ものこそが、まさに供応（おもて

なしの意味、饗応とも）の精神なのである。徒然草に引きつけていえば、園別当入道が『百日の鯉』という修行をしている途中だから、その一環で私の包丁さばきをご披露しましょうという形にもついていたことが演出であり、他ならぬ「お・も・て・な・し」だったわけである。

ところで、この「おもてなし」なるものの姿をよりはつきりさせるには、「おもてなし」という柔らかな大和言葉ではなく「接待」という漢語にする方がわかりやすい。そうすれば微妙な陰影はいっそう際立つからである。すなわち、相手に満足してもらえよう振る舞うにしても、そこには相応の対価を求める心がついてまわることが見えてくる、ということである。もちろん行為に伴う対価は正当なものである。頭ごなしに否定されるべきではない。だが求めるべきものは求めるのが人と人との当たり前の関係だとしても、表向きは無償の奉仕を装うのが日本流「おもてなし」である。

かなり以前の話になるのだが、「おもてなし」について考えさせられる場面に遭遇したことがある。観光雑誌でも有名な京都の某寺院のできごと、禅宗のお寺には「悟りの窓」と呼ばれる円形に象られた窓があり、窓越しに庭園の紅葉を眺めることが魅力と

されている。折しも観光シーズンたけなわ、たくさんのお客が訪れては、雑誌に載っているのと同じ構図での写真を撮ろうとしていた。雑誌と同じ写真だとしても、自分で撮ったものはひと味違う。訪れる人々はみな儀式のように窓の正面に立つては窓越しの一枚を自分のカメラに納めていく。

そこへガイド役の人物が夫婦と思われる二人づれを案内して現れた。客のお二人も、他の観光客と同じようにカメラを窓に向けていた。事件がおきたのはその後である。ガイド氏は、いつもそうしているのか、ごく自然に二人を縁側から窓の外へ連れ出したのである。そうして窓越しに二人の記念写真を撮ってあげた。他にたくさんのお客がいて、皆が窓に向けてカメラを構えているその前で。

ガイド氏にしてみれば、自分が案内する客に対しては「おもてなし」を尽くしているのだろう。しかし「おもてなし」が対価との関係で成り立っているためか、ガイド氏の視界には自分が案内している二人の姿しか入っていなかったようだ。順番待ちを無視して割り込んだわけではない。それに縁側に通じる潜り戸があることを知っていたのはガイド氏のお手柄である。そして窓越しに庭を撮るだけでなく、窓をフレームにして本人たちを撮ってあげれば、記念写真としては最高だろう。そこまでならガイド氏は十分に務めを果たしている。た

だひとつ、客を縁側へ連れ出して写真を撮ろうとすれば、その行為を迷惑に思う第三者がたくさんいることへの配慮が足りなかった。ガイド氏自身と「おもてなし」を受ける対象者だけなら無用の配慮だが、あいにく他にも観光客がたくさんいるタイミングだったものだから、場の空気は一瞬にして険悪なものに変わってしまったのである。対価を伴う「おもてなし」には、それが及ぶ範囲もある。それがみごとに露呈された瞬間でもあった。



円山応挙展を観て

駒田明克

先日、小生久々に妻と二人で名古屋へ出かけました。目的は愛知県美術館で開催されていた円山応挙展を観るためです。

小生、円山応挙についてはこれまで名前は知ってはいるものの、どのような画家なのか、ほとんど知りませんでした。

好きなテレビ番組のなんでも鑑定団では、度々円山応挙の作と称してニセモノが登場してくるので、鑑定士の河内女史の解説を聞いて大体こんな作風の作家ぐらいのイメージは持っていました。

しかしながら、実物は全く小生の想像を超えて居りました。

円山応挙は江戸時代中期の18世紀、伊藤若冲や曾我蒼白、池大雅などが個性をふるった京都画壇で圧倒的な人気を博していたそうです。

「写生」を基本とした応挙の絵は誰にでもわかりやすく、画題の知識や文人的な教養なしでも楽しめるという新しさがあったようです。

けれども応挙の作品は平的な写生にとどまるものではなく、障壁画や屏風絵において部屋や画面の形を絵の空間表現に利用したトリックアートの着想や、大胆・軽妙に筆を操りながらリアルさを感じさせる驚異的な技量など、多くの革新と魅力に満ちています。

今回の円山応挙展は愛知県美術館開館20周年記念として企画されたもので、国宝・重要文化財や展覧会初公開作品を含む代表作を紹介するとともに、西洋の遠近法を用いた若年期の「眼鏡絵」制作や中国絵画の学習、後世への影響など、様々な角度から応挙の実像を再考しております。

なかでも庄巻は、今回の企画のメダマといえる大乘寺蔵の重要文化財・松に孔雀図十六面（一七九五作）でした。愛知県美術館の洒落た展示はこの障壁画を大乘寺客殿の空間を出来るだけ再現するように試みられておりまし

た。

自然の太陽光が朝・昼・夕と移り変わっていくのに合わせて、この自然光の下、大乘寺の客殿の中でこの障壁画が微妙に変化する様が照明装置の工夫により、約三分間に凝縮して再現されておりました。

その前にしばらく立っていると、大乘寺客殿の中でこの作品を鑑賞しているように錯覚させられる、見事な展示演出でした。

願わくば、観客がいない静かな空間で鑑賞したいものでした。

家内は昔といっても女学生時代にこの大乘寺の障壁画を観たそうです。当時は一階の大広間に十六面の障壁画があり、ごく近くで鑑賞することがで

きたそうです。また、二階の部屋にも応挙

の数々の作品があったそうです。良き時代であった言えますが、現在はどうも大乘寺では一部の作品しか観れないようで、しかも厳重な文化財管理のもとで、とても作品に身近に楽しむという雰囲気では無さそうです。

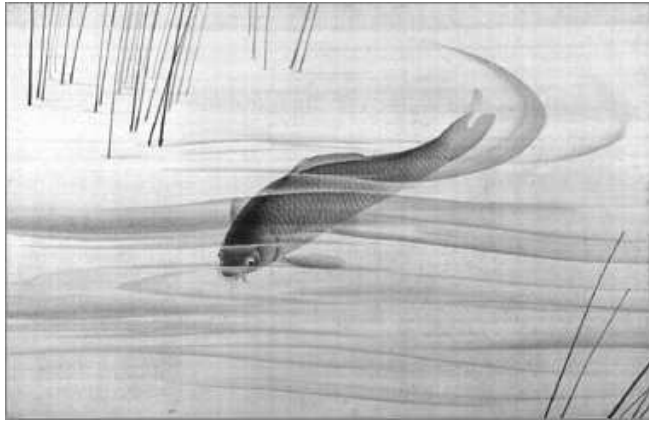
応挙の画風上の特色として第一に挙げべきことは、近代の日本の画家のなかでも際立って「写生」を重視したことらしいです。応挙は常に懷中に写生帳を忍ばせ、暇さえあればスケッチに余念がなかったようです。

現存する『花鳥写生図巻』や東京国立博物館蔵の『写生帖』などには動物、昆虫、植物などがさまざまな角度から描写されているそうです。

応挙画は、こうした写生の技術を基礎としつつも、日本画の伝統的な画題を扱い、装飾性豊かな画面を創造しているところが特色とのこと。

小生、以前京都市美術館と相国寺で伊藤若冲の作品を鑑賞し、昨年は名古屋市ボストン美術館で曾我蒼白の雲竜図を観て圧倒され、今回円山応挙の作品の数々を観ることができ、あらためて江戸時代中期の三人の凄さを実感しました。

図鑑等で観ると実物を目の前にするのは全く違いますね。これからもまだまだ観ていない画家は大勢います。機会を見つけて本物を観ていきます。



鯉魚図風炉先屏風

いよいよ輸出部生活がスタート4

(またまた横道にそれる…)

明石 幸次郎

明石の輸出部での指導員になったMさんは、自分が韓国の担当から外された経緯を自席で述べ始めたが、Mさんにとつて頭ごなしで外された事は、話し始めると悔しさが滲み出てきたのか、口調が相手の鄭さんから韓国人への批判に変わってきた。Mさんも周りの人に聞かれるのもまずいと感じたのか、席を替えようと

言って、少し離れた打ち合わせルームに明石を連れて行った。その部屋に入るとテーブルを挟み、椅子が4つあり、奥の椅子にMさんが座り、手前に明石が座った。場所を変えたので、少し冷静になったのか、Mさんは、韓国の話から外れて、

明石の個人的な経歴とか出身地を聞いた。明石は「出身は兵庫県の明石で大学はD大で、明石高校では野球をやっていました。大学では、思うところがあり、山をやってみました」と応えると、「明石高校と言うと、人事部のYさんを知ってるか？Yさんは、俺のK商科大学の二年先輩で口は悪いが、優秀な人や」と言った。明石は「そうですか？Yさんは、私の実家の近くに住んでいて、私が中学の時、Yさんが大学生で、家で勉強を教え

てもらってました。私が大学二年の時に亡くなった兄貴とYさんは、幼稚園から高校までの友達で、母親曰く、Yさんは小さい頃、よく家に涙をたらして遊びに来ていたが、大学を出てエラくなって、大阪の大きい会社に入ったと言っていました」横道に反

れて、雑談になりかけてしまっそうな時に、部屋をノックして清楚な女子社員がお茶を持って入ってきた。女性はお茶をMさんと明石にそつと置くと「同じ課のG本です。宜しくお願いします」と明石に向かつて丁寧な言葉を下げて挨拶をした。驚いて明石も「今度、S工場から来ました明石です。行儀が悪いですが、宜しく」と頭を下げた。G本さんは「いえいえ。A課長を始め、課の皆さんお行儀の良い方は、おられませんので、明石さん大丈夫ですよ。では、失礼します。Mさん何かあれば、呼んで下さいね」とにっこり笑って、ドアを静かに閉めてお盆を持って出て行った。Mさんは、お茶を一口飲んで「おい、エエ子やろ。手出したらアカンで！ああそうか、Yさんは今は偉そうにしているが、涙垂れやっったか？面白い今度、会ったら言うたろ」と、

にたつと笑い出した。明石は、しまった余計な事を喋ってしまったと思い、「あの頃は、小さい子は誰でも涙をたらしていたの違いますか？私もよく涙水が出たら、その度に右袖の服で拭いていました。袖口が涙が乾きテカテカになり、何で鼻紙でかまないのと母親によく叱られていました！

Mさんはどうでした？」「そう言えば、下町に住んでいる奴は、涙垂れが多かったなあ。俺は違った」とMさんは自分は山手に住んでて、涙垂れの、Yさんとか、お前とは育ちが違ふみたいな口調になった。明石はMさんの涙垂れに対する反応を見てとつさに、この人は単細胞で、プライドとエリート意識が高く、その反面、人に対する差別意識の強い人であると直感的に感じ取った。

続いてMさんは、「お前、Yさんに勉強を教えて貰ったんか？そしたら、この会社に入ったのは、Yさんのもないです。私は偶々、母親からYさんがこの会社に入ったとは聞いていましたので会社の名前と、テレビのCMに“米作りから国作りまで”という戦前の国家主義的なキャッチフレーズで泥臭い会社のイメージがあり、記憶に残ってました。メーカーに行く積もりはなく、商社ばかりを狙ってました。まあ、何社か受けて専門商社は内定を貰ってました

に思われて、比較されても困ると思いませんでした。そこで、残ったのがYさんが入ったと聞いたこの会社でした。

偶然Yさんが会社の玄関の前に立っていたので、挨拶をしたら、明石久しぶりやな！処でお前何しに来たんや？といわれたので、昼から重役面接があるので来ましたと言ったらYさんは、お前、何で俺に連絡して来なかつたんや？と言われたので、いや、ご迷惑を掛けても

思いましたので、この部署も分かりませぬのでか？と聞くと俺は、人事部の係長や、今は採用担当やと大きな声で言われまして」と応えるとMさんは、「へー、そんな偶然に会うこともあるんやなあ、Yさんに会った時点で、もう採用されたようなもんやんか」と明石の話に興味を持ったようで、「それからYさんは、私を会社の前にあるレストランに昼めしを馳走してやると連れて行ってくれました。そこで、確か350円位のランチを頂きました。これが、結構旨かったの

この会社に入ったら毎日こんなランチが食べれるんですか？と聞いたら、アホか、会社の食堂のめしは不味いが社員は皆こ

勉強を教えるような口調で注意されました。続けて、お前、他の会社も受けとんのか？と聞かれました」Mさんは「まあ、その反応は人事部のYさんらしいなあ。俺も大学の先輩であるので、Yさんを就職活動で訪ねて行った時、お前ちょっと態度がデカイので、会社に入るまでは？もう少し大人しそうな恰好をしておけと言われたが、考えて見たら、Yさんの方が俺より遥かに偉そうにしていたし、今も人事部で若い奴をガングリ叱かっているぜ。ホンマ、明石出身の人は言葉使いも粗いなあ？鯛やら蛸がとれる漁師町やからか？」とアンタも漁師出身かのように問われた「私も従兄弟に漁師がいますが、そいつは確かに言葉使いは粗いですね。しかし、私もYさんも家は漁師ではありません。それは人に拠ると違えますか。勿論、土地柄にも拠りますが、ウチの泉州のS工場は確かに言葉が粗いですね、工場と言う事もあり、私も言葉使いを真似しないと仕事が出来ないような雰囲気もありましたが、私は自分の言葉使いを変えませんでした」Mさんは「そうか、T畑にもS工場の資料課の時に明石弁で一発かましてやったんやなあ」「さっき、A課長とT畑さんと喋っていたのを聞かれました？咬ましたのではなく、工場が元商社マンに咬まされかかったので、メーカーの資料マンの私が正論を言ったまで

です。それが、その通りになっただけですよ」と言うことで、雑談は終わりにかけて、Mさんの韓国性悪説の話の続きになった。



スポーツと体罰

祖蔵 哲

現代社会ではスポーツの世界に限らずハラスメント（尊厳を傷つけた

り、不利益を与えたり、脅威を与えること）、すなわち人権侵害と感ぜられる事象が増加しそれによつて被害を受けている人が拡大している。その原因を世界の急速なグローバルゼーションによる価値観の変化や経済停滞による社会の閉塞感などに求めることは説明的には有効であろうが解決策となるとたちまち困難に陥る。さて

本稿のテーマはスポーツ界におけるハラスメント、体罰やパワハラの問題であるので意見を限定して語ろう。

まず、現代日本におけるスポーツの位置づけというものから出発する必要がある。明治以前、すなわち日本が近代化される前にはスポーツという概念はなかった。鍛錬、修練といった精神力をきたえるものとしての武道などが行われてた。近代化とともに人

の手段として、またルールを統一化し記録を更新することを第一とする競技形式の運動が導入された。それと同時にスポーツは国威発揚として利用されその手段として採用されたのが軍隊の訓練である。すなわち日本では急速な近代化の結果、スポーツはこれらをすべてを實現するものとして重荷を背負わされてきたという歴史がある。

語源から調べるとスポーツというのは本来「気晴らしをする」という古フランス語から来ているという。心身ももの健康のため、個人のために活動するのが本来のスポーツの意義であろう。しかし、現代のスポーツ、オリンピックや大会は商品化された「興行」以外の何物でもない。極端に言うると古代ローマ時代にコロッセオで行われていた「ライオンと奴隷の格闘」と同じようなものである。どちらも政治的な意図が背景に潜んでいる。

そういった本来の目的から大きく離れたさまざまな問題を抱えた現代のスポーツだからこそさまざまな事象が起こるわけである。特に現在日本社会で起きている体罰やパワハラは多くは排他的な「利権擁護」にその原因がある。

先にも述べたように現代のスポーツは本来の目的から大きく離脱し「勝つため」「記録を更新するため」から「他の人に感動を与えるため」になりそしてそ

れを「商品化するため」という新たな使命をあたえられている。これらの事象は商品を生産するには組織的な取り組みが必要となる。そこで生まれるのが閉鎖的なスポーツ村である。この組織の指導者はこれらのことをなさねばならないためさまざまな特権を与えられる。またそれに参加するものはその目的のためには指導者に対して「白紙委任」をしなければならぬ。なぜなら「スポーツ」の目的達成がすべてのものに優先する仕組みだからである。子供の親や親族、地域はこの指導者にたいしては無抵抗である。スポーツ少年少女を育成するためには親は昼夜、休日をとらず全霊をその行事に捧げる。その見返りとして有名な学校への入学、有名企業への就職、最近では政治家への道等々が用意されているからである。

このような現代スポーツの世界では体罰やパワハラは必然である。

「高度資本主義社会」と「村」一見歴史の両極の世界のようみえるがそこに「利権」が関係すると事態は時を越える。

そこで犠牲になるのはつねに弱者である。スポーツ・エリート影に隠れ、重荷に耐え切れなくなった子供たち。彼らはこの「スポーツ」という現代日本が近代から解決してこなかった積み残した問題の犠牲者である。